順応科研においてしてみたいこと

人工物（インフラ）が地域社会に何をもたらしてきたか
＠田老町（岩手県宮古市）

あるいは漁師が防潮堤と共に生きてきたということ、これからも生きていくということはどういうことか、に関する研究

福永真弓

１．人工物の環境社会学：田老町における「今ここ」から

１）Social-ecological sytem とcommons 論の相似性

・どちらも人「と」自然の関わりを見ようとするものだが、もう一つの核としてのインフラなどにみられる人工物をアクターとして捉え切れていない。

・「抗いの論理」を人工物に向ける議論は、人工物から出発する／自然全体を構築と交渉を繰り返してきた人工物として捉えざるを得ない（Anthropogenicでしかありえない)現在において、工学的議論に対応できなくなる。

・一方で、「抗いの論理」とは別に、どのような論理のもとで（単なるコンクリート国家とか開発国家で片付けるのではなく）人工物が地域社会に「おかれて」「そこにあり続けて」きたのか、「あり続けてきた」ことで地域社会にどのような新しい関係性が生み出されてきたのか、についてきちんと研究する必要性→震災後の復興の論理を地域化できない現状

２）シンプルな研究動機：田老町の「復興」と漁業者の苦闘の乖離

・インフラが町の形を変えるとはどのようなことか。

・矛盾を矛盾にさせない「論理の接合」はなぜおこったか。漁業の町と防災の町→二つの論理

事例：岩手県宮古市田老町の巨大堤防と収縮する未来可能性（「町が消える」「もはや待ちはない」「姥捨てヤマ」高台移転の聞き取りから聞こえる実際の言葉）

①「沿岸から沖合、沖合から遠洋、再び沿岸へ」の地域漁業のあいだにある「堤防の論理」と「漁業の論理」の接合と抗いの歴史

②抗いのポリティクス（反対運動をおいかけるような視覚）では読み切れない地域の文脈

堤防を越えた津波
By 畠山昌彦さん
〈田老漁協〉

漁協前の「まち」
By 畠山昌彦さん
〈田老漁協〉

それでも「磯る」のはやめないんだってば
By 畠山昌彦さん〈田老漁協〉

③「復興」における漁業組合の役割への期待と地域における矛盾

- ヤマ側集落と沿岸側集落をあわせて「一つにした」合併のための仕組みの瓦解と地域漁業の展開の相関性→「一つにした」ガバナンスの終わりと新しい「ガバナンス」の必要性
- 津波のたびに繰り返されてきたインフラ事業による「地域ネットワーク」「産業・資本ネットワーク」「政治ネットワーク」「労働力のネットワーク」の再編とその機能変容

（「しがらみ」を別の形で捉える工夫）

・それでも、「家業だったところに人が戻る」ことの意味と沿岸型漁業再生の道筋が準備されていたことの強み

３）再び地域漁業に集積するネットワークの意味と、人びとの未来可能性を縮小させないメソッドとは何か

・ヤマ側からの働きかけ

・鉱山公害・津波などの攪乱から「再生してきた」歴史的文脈の人びとの気づきと、それが現在に反映されないもどかしさ、いらだち

・自然の創出・自然化という新たな選択肢の見えない構造を乗り越えるにはどうするべきか

・人口維持・拡大という「にぎやかさ」という「かつてを取り戻したい」気持ちと、「小さく、にぎやかに縮んでいく」という新しいあり方を模索する上での葛藤

・人びとの〈生〉の未来可能性≠地域の「復興」（行政的な意味の）

２．人工物を対象にする意味：開発後の社会から始めるということ

・生態系サービスが得られるよう、「森林化する」「湿地化する」などの自然化のプロセスが、人工物の跡地／開発の跡地／人工物の新しい形としてはじまっている。

cf.）「すでに工学的トレンドとして定着」

→特に農業、林業が行ってきた従来の「再生産の確保」と異なる点は何か。

・紛争・大規模開発による、開発後の（人の利用できる生態系サービスが得られにくいという意味での）「死せる土地」の増加の現実と「再自然化」できる土地の奪い合いという新たなフェーズ

・一方、日本においては、人工物と共にある「自然化」や「死せる土地」が増え続けていくこと、「放棄されて自然化？する土地」という古くて新しい課題が山積。

・田老町の事例を少し新しい観点で切り出してみたい。

※佐藤仁さんが一時期議論をされていましたが、あまり当時は盛り上がらなかったようです。

３．自分の他の研究との関わり

「自然化と自然創出の環境社会学」

- ポスト産業空間をどう使うか→自然化と自然創出の側面に特に着目し、それがG. Marshの『人間と自然』などと重なりながら現代的な意味をどう持ち始めているか、を考える。（こちらはむしろ議論は環境倫理的）

- 開発、共有地、自然保護・再生では見えない事象のはじまり
- 第一次産業における領有性の再編が生み出す新たな空間
- グローバリゼーションに伴う場所性のはく奪の深化と、同時進行する場所性のイデオロギー化（ex. 移民と流動社会における「場所」のイデオローグ）

→自然化、自然創出が新たな国境や所有をめぐる教会を作る新たな営みとなっている。

ex.) Cohen, Shaul Ephraim のPolitics of Planting （中東紛争における境界の拡張を自然化（森林化）が担うという古くて新しい政治力学の再創出

・インフラ後の社会の未来をどう描くか、という日本における問いにどう答えるか。